WASON
HQ
1104
J74+

驛遞局認可

明治十九年十月十五日發行

女學雜誌

每月三回發兌
一冊正價五錢
一ヶ月十五錢

第三十八號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Women's Magazine

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 38. OCTOBER 15TH, 1886.

第參拾八號

EDITORIAL: Woman and Christianity: No. II.

LEADING ARTICLE: Female Education: No. I, by Mrs. T. Nakashima.

MISCELANIES: Dietary Improvements and Method of Cooking; A word of Caution to Ladies concerning Western Costume (concluded); Home Department.

CRITICAL NOTICE: Mr. K. Suzuki's "Nihon Konnin-hō Ronryaku (Marriagein Japan); Mr. N. Shindō's "Joshi-Hitsudoku (concluded).

BIOGRAPHIES: Life of a Woman.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

ADVERTISMENT.

●社説 女子と耶穌教(其二)

●論說 女子教育策の一端(第二篇の一)中嶋とし

●雜話 食物料理改良の談 ○洋服着る貴婦人に申す(其二)○いへのとも

●批評 鈴木券太郎君の日本婚姻法論略○進藤直温君の女子必讀(其二)

●佳傳 松嶋佳人傳(第一回)

●寄書 女學雜誌を批評し併せて誌上の貴姉に一言す(大石さかえ)○蝙蝠の說(島浪江)○智識は失敗より來る說(佐藤てつ)○祝文(丹野ふさ)

●新報 十則 ●廣告

●物の始め(第一)

○髮ゆふ始め 天武天皇白鳳十年男女始めて髮を結ひしとあり依てうるし塗の冠を着すその以前は織物縫もの或は錦の冠を着せしとぞ

○呉服の始め 應神天皇十四年呉の國よりクレハトリ、アヤハトリと云へる二人の女を召て機を織らしめ初て其業を習ひ傳へしとあり呉の人織はじめしゆへ呉服と云ふなり

○三味線の始 文祿元年琉球國より始めて三味線を渡す其頃瀧澤撿校と云ふ人あつて淨瑠璃文句に節をつけたり亦角澤撿校と云ふ人あつて音曲に巧みなるか上るりの節に合せてかの三味線を彈き始めしなり故に后世三味線ひきを野澤鶴澤或は豐澤なとゝ云へり

○女舞の始め 永久三年京都に於て島の千歳和歌の舞と云ふ事を始めて世上に流行す是れ白拍子なり

○淨瑠理の始 天正十二年織田信長公の侍女小野のお通といへる女信長公の命によつてむかし牛若丸三河國矢作の長者が娘上るり姫の元へ通ひ玉ひし物語を十二段に作れり是れ淨瑠理の始めあり

○白粉の始め 延寶四年和泉國堺の小西某外國の大官と云ふ人より製法をつたへて諸國の根元となる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第參拾八號　明治十九年十月十五日

●社説

○女子と耶蘇教（其二）

吾人は前回に於て耶蘇教がよく女權を伸張したる古今の實例を擧げ且つ此教を信じて初て女の心得定るべき事（一）此道行れて初て男女の交際清潔となるべき事（二）此を守りて夫婦間の愛いよ〳〵深うなるべき事（三）などを説明したり因りて今回も亦た引續き此教が女流に對する其他の關係を示すべし

○四　人生最上の樂場所は何處にありや、嵐山櫻樹の下か馬溪梅香の間か月さへ波靜かなる石山寺か或は夜會宴會の席か踏舞觀樂の庭か海中に碁石を點したる松島か水上に龍宮を移したる嚴島か天橋を横に架たしたる天の橋立か、是何れも皆な風流の佳所ならずんば歡喜和樂の場所なり一朝一夕之に臨めば無限の樂固より之あるべし然れども人生は不定の有樣を好まず終始朝夕つねに在つて而も常に樂を受んとを希ふもの也思に此樣の念を滿足すべきは實にかゝる風流和樂の場所にあらざるべし傾きたりとも吾茅屋に住し貧なりと雖も家族團欒し父子昆弟相親睦して少かも掛念なき吾家と云へるものぞ即ち人生最上の樂場所ならん玆には世辭も不用なり掛引も不用なり嚴肅にして競々たるべきいかめしの禮式も亦た不用なり己れ粗服を着すれば他も亦た粗服なり己れ困苦すれば他も亦た困苦すべし貧富共に同じく喜憂つねに一なり他が吾を見下ぐべき心配もなければ吾が他に示すべき虚勢もなし暇あれば相集りて談笑和樂し事あれば相助けて拮据經營す父母は子を愛していつはりなく子は父母に仕へて不安の念なし夫婦つねに相睦みて一點のさまたげなく兄弟相和して一人の他人なし人生豈にかゝる愉快の地あらんや之を以て西洋人はホームと云へる者を非常に尊重しかの國の敎には家を以て天國の雛形を示すものとなせり此樂や經驗なきものゝ想像する能はざる所にして經驗あるものゝよく口に盡し得べき者にあらず。然るに此家族の樂は何如にせば十分に行はるべきや家族相樂まんには人々先づ相ひ睦まざる可らず然るに此の親睦を行なはせんには實際何如の方法か尤もよろしき者なりや我國當今の有樣を見るに父はいかめしき顔をして終日不平なる如し母はたゞをち〳〵として夫の前には自由に談話をも爲さず子はたゞ叱られんとを恐れて父母の前に戰々たり兄弟は終日喧嘩して反つて他家の人と交り夫婦は相遠かりて姑舅の評を

さけんとす其さま恰かも會社の如し茲に最上の樂行はるべしとハ思ハれざる也此故に父は外出して昔ながらの老友を訪ひ今日一日は漸く額の皺を伸したりと云ひ母は六あみだに參詣して嫁のうれさを棄てありき夫は花柳の地にやうやく樂を滿足して妻は一生を瑕と血の道に費し兄弟はたゞ別れて近邊を遊びあるく實際尤もあはれむべきもの多しと云ふべし吾人思ふに斯る弊を減じて一家を親睦せしめ能くかの天國に似たる程の和樂を起さしむるものハ實に耶蘇教なるべし此教に於て父母は子を愛し子は父母を敬し兄弟夫婦相互ひに相愛すべしなど教へたる道に從ふときは是非とも一家の睦みを來すべき道理あるは言ふに及ばず若し其信徒の家々に於て行ふ所の實際を見れバ何人なりとも斯くして一家の和らがざる筈なしと思はるゝならん先づ朝起出づれバ人々一日の幸福を祈禱し聖書と云ひて此教の道を記したる書物を朗讀しさてそれ〴〵の仕事を行ひ夜業了りて最早や寢所に入らんとする前は一家族相集りて或は讚美歌と云へる最と樂しき歌をうたひ又は聖書をよみ感じたる事柄を話し互ひに祈禱して後ち伏戶に入るなり此習慣は繁忙なる人々には得行はれまじきとなれども朝夕一人〴〵に祈禱し聖書をよむとは何如なる信徒の家にも必らず行るゝことなり然るに聖書の中には人を愛せよ家族を愛せよ等の教充滿し又祈禱するには是非とも人を愛するとの心なくてハ適ハぬものなれば一日の中に吾心の教となるもの必らず之れあり斯て日々を送り人々互ひに相へりくだり愼しむの念あらんに何如で一家の親睦せざることあらん况んや日曜日毎にハ全家族擧つて教會に趣き父母夫婦兄弟みな各自の心得となるべき教を受け其日は皆な〳〵仕事を休みて斯る樂しき話のみを談ずるなり此故に知らず〳〵互ひの愛を深うして一家の和樂すると非常なりそも〳〵女は男子をなぐさめて其心を引立べきものなり故に家内の樂を增すと云へる一事は女の爲すべき仕事中の最大なるものなり夫若くは兄他所に出でゝ世の中に働くとき固より數多の失望もあるべしいろ〳〵の心に不快なる事もあるべしかくて弱り果てたる心に躰をつからせて家に歸らんとき之を慰め之を引立てゝ明朝はまた氣を取直し平常ょ倍する爽快の精神を以て外出するやう取扱ふは全く女のつとめなり故に女は家内のかざり付けより琴笛のなぐさみなど凡そ家族の樂をまさすべき美術の一と通りは心得て可なることなるが其上に尤も大切なるは即ちかの教なり若しかの教を信じて自分の心を優にやさしくしよく

家内の風波を靜めて家と云へるもの〻樂を維持せんには其功能や敢て外に働くべき男子の下にはあらじゆえに女子先づ如此くならんか玆に於て一家の親睦いよ〳〵あつかるべき也

○五　凡そ子供を教育するは母と教師との務なり母は其膝下に置きて家庭の教育を施し教師は學校に於て之に種々の學藝を教ゆるなり何れも劣らざる程に大切の事なりとは云へ當今の有樣に就て考ふれば家庭の教育と云ふ者ぞ尤も大事のことなるべし故に母たる者よく其務を知りて膝下に孟母の心得を施せば其子は之が爲に學者ともなり又英雄ともなるべし子供は必竟母親の導き次第にて何如やうの人物ともなる者なり思ふに女は自ら政事家となる可らず須らく其子を大政事家に育てあげて天下の權柄を握るの基をなすべし女は自ら大學者となら ざるも不可なし須らく其子を非常の學士として四方の理論を動すやう教育すべし之を温厚の君子とするも之を快活の秀才とするも皆な母の心得次第にありと云ふべし然るに母をして斯る教育を施させんには先づ母たる者の心得に大なる覺悟を要し次に此の心得を行ふにいろ〳〵の大切なる方法あるなり玆に至て考ふる時は吾人は確く信ず母たるものゝ先づ耶蘇教を信ずるの優れるに如かざる也（請ふ次に其理由を述べん）

● 叢話

○食物料理改良の談

むかし支那に孔明と云へる人あり天下魏呉蜀の三に分れて英雄三方に割據し戰鬪やむ日なくして智謀計畧の士縱橫なみちみちたるの日當時一等の大豪傑として古今に雷名を轟かしたる伏龍先生の事なり屢ば祁山に伐て出で敵の英將司馬仲達と謀を較べたるに或軍の折かれ塞壁にとぢこもりて陣太鼓の音をもきかせずすゝめ掛たる戰も知らず顏して只だ孔明の軍路をふさぎたり此に於て孔明かれを激させんとし使に女の喪服を持たせて敵軍に入らせ云はせたるは將軍終日矛を交へずして定めて無事に苦み玉はん謹んで志を送り少か之を慰むと申す仲達くわつと憤るよと思の外使を引見して靜かに問へる樣孔明朝夕何如なる事を爲し玉ふぞ使得たりとして曰く、吾丞相日々寸暇なし刑罰の杖二十うつより以上の事は一切自から爲し玉ふて餘人に托せ玉はず、ホヽー而して孔明日々どれ程の食事をさるゝや、使餘りの事にあきれたれども思はず實を告げて云ふ、サレバかく御働なれども御老躰のとなれは日に數合に過ぎ玉はず。仲達鷹揚氣に傍の人を見反へり申すやうは孔明かく働いて斯く少食す決して久きを得べからずと

果せる哉其年の秋八月かの伏龍先生孔明は卒然として五丈原草の露と消たり

そも〳〵人の食物に於けるは猶ほ燈明の油に於けるが如し人は日々勞働して力を費し汗水を流し且つ下に分泌して始終身躰の幾分を失ひ去るものなりゆゑに是非とも之を補ふべき食物をとりて其失ふ所のものを足さゞる可らず然らざれバ此れ斷えず燈をもやして尚ほ油を注がざるものなり有明のあかしやう〳〵暗うありて遂に消滅する如く人も追々によわり果てゝ終に餓死するに至るは甚だ明白の事なり。然るに此食物を食ふは主も身躰の不足を補ふの故に由るものなれバ多く働いて多く力を費す者は亦是非とも多く食はざる可らず優遊してなまけ暮らす人よりも書生の食量多く書生よりも車夫が多く車夫よりも農夫の食ひ高の多き等皆な其勞の多少によりて食量に増減あるものと見るべし、之に付き面白き話と云ふはヲンケストル氏の說なり前年ある鐵道建築の受負人が數多の職工を雇ひて仕事を爲すうちに日々その勤惰を撿査せんとしたるが數多の人數あれバ之を知るによしなく遂に一方を案じ出して職工等が食物を食らふとき其量の多少に注意したり是れ多く食はざる者あれバ則ち之に目を注ぎて其後の勞働を見たるなり然るに斯く食量の少きものは不思儀にも皆なナマケ者なりければ常に此方によりて職工を吟味したりと云へり眞に働くものは必ず多く食はざる可らず若し働いて食はずとあらば其人や實に危し到底久しく健全の人にはあらじかの仲達が孔明の食少くして仕事の多きを見拔き到底久しからじと云へるは實に此理あるが故なるべし

今ま我國の有樣を考ふるに世の中年々せハしくなりて生計は恰かも戰爭の如くなりたり昔しは高楊枝を口にして武士は食はずとも可なりと云ひたり此れ其頃日々の仕事なくして言はバ寢て居るも同樣なりしゆゑなり然るに今日の如く仕事多うありて勞働を要するとの夥しくなれバ勢ひ食物をふやして身躰のつかれを補ハざる可らず此れ當然の理なるべし然れども維新以來大食家が殖えたりともきこえず三度の食事を一回増したりとも聽及ばざるのみか吾等が若い時は一升飯を食ひたりなどの高慢話を老人よりきゝて今の少年の少食をあざけらるゝこと度々あるやうに覺ゆれバ當今の人は食量を減じこそすれ増したりとは思はれざることなり仕事多くあり身躰の疲れ甚しうありて而も食物の之を補ふと前日にまさる所なしと云はゞ今の日本人たるもの何如て五丈原の孔明たらざるを得ん

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

是れ仲達ほどの才なきも皆なよく承知すべき明白の道理也されバ實際日本人民の躰追々に小さうなり力段々に弱うなれり先づ祖父遺念の衣物を着て見よ必らずうちかけ着たるやう長く引ずるべし先祖傳來の鎧あらバ着けて見よ必らず尙半身を容るゝの餘地あるべし是れ古人よりも今人の躰非常に小くなれる證據なり其力量の如ハ言ふ迄もなく非常に減じたれバ今の靑年に古人の如き荒仕事を爲し得る者は十八中一人もあらざるべし夫れ仕事多うなり身躰多く疲れて而も之を補ふべき食物足らざれバ是非とも其身躰を損して丈を低くし其筋肉を減して力を弱うせしむるなど固より免れがたき結果と云ふべし今の如くにして止まずんバ文明と共に世の中ますく\激しくなり激しくなるにつれて人々尙更に世話しうなり遂にいよく\身躰を損し力量を減じて日本人は全く無氣力の侏儒となるべきなり。そもく\食物をとゝのへて之を料理し能く一家族の餓を醫するは全く婦人のつとめなり故に食物を改良すると云ふも先づ婦人の心得を改めざれバ能ハざると也左れは今の婦人たらん者は現今の食物は如此く不十分のものたる由を承知して之を改良するの謀に注意し能ひ得べき限りは力を盡してその手段を行ふべきものなるべし(未完)

○洋服着る貴婦人に申す　(二)

先づコルセットを固く締るときは肋骨の下側壓迫されて漸く形を損し隔膜下に押されて心臟肝臟も多少の害を蒙るべし然のみならず肺臟の働き自由ならずして息氣遣ひ自ら苦しうなり肺もまた漸やく天然の形を失ふべし特に腰の邊を壓するやうになりて子宮も之が爲に傷み遂には產出る子供の衞生上にまで大なる關係を及ぼすとあるべきなり抑も我國の衣服は當今の世界中にて稀なる程に寬やかなる仕立なり其中ち女の着物の如きは襟を突き出し胸前をたゝみ大きやかなる帶もてたゞぐるく\と卷き丸ろめたるなど惣じて最と温かに身躰をまとふ樣の仕組なりしゆへに今直ちにコルセットを固くして胸の下を締着くる時ハ其害や決して尋常にあらじと思へり前にも述べたる如く洋服着たるものが必しも瓢簞形になるべきとの定もあらざる上に日本從來の習慣に養ハれたる吾々の目を以て見れバ寧ろ樣姿たつぷりとして腰の下のたゞ廣ろがりたるなど反つて見榮あるやう思はるゝなれバ當今初て洋服着け玉ふ方々は斷然西洋の意氣と云へる風姿を棄て衞生上にも我國民の趣味上にも適へるやうの着風を流行らせ玉ハんとを望む西洋の醫學者はコルセットを固くするの弊を歎ずるの傍ら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

また全く之を用ひざるの失をも論辨したゞ之をゆるやかにして用ゆべしと云へり之れ至當の考案なるべしと雖も我國の婦人の如く從來重やかなる帶を着くるの習慣ありし者は必しもコルセットを用ゆるに及ばず下服をそのまゝ腰にて支ゆるともまた直ちに上服へハメ付くるとも差支なきとなるべし但し何れにせよ吾人は只だかのコルセットの固きを斷然廢止すべしと云ふものなり

○いへのとも

問の部

十九。婚禮の式に嫁なるもの白小袖を着用するはいかに。又犬はりこを枕元に置く事。男ちよふ女ちよふをちよふしに着る事。おはぐろつぼを翌日送る事などいかに(松田みつ)

二十。妾に兄とも頼む友ありて常に室を同にして淸き敎を語り共に自己の目的に付て心を打明け談話するなど日ゝたのしく暮し待りけるに互に年若きによりて人々の思ひも如何やと考へ候ひしが淸き眞の神によれる愛をもて兄とし妹となりて交るに何事のあるべきやと以前にまして交の深ふなるやう覺へ候ひしが此頃わられの兩親には如何なる御心よや共に語り共に遇ふ事をゆるし賜はずさりとて其心に從へば兄とも頼む人に離るゝより外なし人目を越へて遇ばわだし人ゝの口にいろ〳〵の惡評もありなん如何せばもとの如く樂しく交るを得べく候や(ゆう女)

廿一。妾の家にいとなれ〳〵しき男きたり少しも利益なき事を語り妾立てばその男も立ち坐ればその男も坐り歩めばまた妾の後より歩み來り束の間も妾を離れずよそに見る目も如何やと心を常に苦しめしはあれその男の此後來らさる方法(怒らすることなく)ありや希くは敎へ賜へ(淺山けふ)

經驗の部

一。妾こと一人にて數度旅行いたし候がまだ知らぬ宿驛をおてゝ車を命じ參るとき其驛の何處までと定め宜しきや知れ申さねば時としては宿の掛りにて車を下さるゝとあり斯て五六町の間は全く損となり又時としては宿の外れにて車を下さるゝとあり斯て更め命ずべき車なければ止を得ずまた其車よ乘せらるゝなど色々の不都合に出て合ひ申候殿方と違ひ女の身には聲高よ言爭ふとも得ならずいつも斯る損を致し候より後には一方を案じ申して車屋に直段を定るとき何々宿の分署の前までと約束いたし候分署は大抵宿町の中央に御坐候上に何かの間違の時御さとしを乞ふべき便利も有之候まゝまだ知

らぬ所へ行くにはいつも此方を行ひ申候が甚だ都合よろしく其後は前の如き損もいたさず候（府中驛中村しづ）

○二　樽の鏡を拔き取るに一の奇法これあり候たゞ其上をうち叩くともなかく拔け申さず其法は樽一ぱいに水を滿たしたる後一つ二つ鏡の上を叩くべし鏡グルリと傾き申さん拔き取るとまことに容易く候（松田みつ）

○三　小よりを撚るとき繼ぎ目を平らにして高くせざる法を考へ候其法は繼ぐべき切れ紙の端を三角なりに摘み取り之を裏反してその摘みたる邊をより了りたる帋端の間（亦た三角なりを爲す帋端の底にわたる所あり）に挿みて撚るなり彼の切れ帋の端を摘み取るは人の知る所なれども之を裏反しにするとは少かの事のやうにて人の知らざる術なり（松田龍方）

○四　男の書生と女の生徒とは相違する所いろくあり余が之を敎ゆるに付て經驗せるとの一は男には成るべく其勉强をはげますやうにすべきと女には成るべくその勉强を寛かゝせしむるやうにすべきと是れ也男はとかく放慢に流るゝとあり然れど女は生徒同士あひ競爭するの念はげしきゆへにや度ゝ過て勉强すると屢ゝあり故に敎師はよく此一點に注意し決して同樣の敎授法を用ゆ可らず（一敎師）

○五　慈姑は葉樣によりて味によしあしあり妾の經驗は生醤油にてまづよくく之を煮たる後砂糖味醂などすべて程よきものにて味をつくるとあり初めより常のやうに煮るときは決して味宜しきとを得ず候（家里こう）

○批評（第十一回）

(11.)日本婚姻法論略　中本一冊（百九十八頁）定價五十五錢

此書は山陽新報の主筆鈴木券太郎君が編述ありたる者にて日本婚姻條例の草案に擬して作られたる意見と見へたり全卷を十二章に分ち婚姻の性質、婚姻の年齢及父母の承諾、を初として婚姻の法式、無効の詞訟、結婚後伴生の義務及雙方の義務、離婚を爲すとを得る場合、離婚の効力、別居並に其効力、婚姻したる婦女の所有物、離婚後財産處分法、日本國民と婚姻したる外國の婦女ハ我國の法律を守るべき事、等を論辨し且つ外國人と結婚の事に關する日本の現行法律並に佛國婚姻法及び離婚法等を參照として掲げ最後に佛國婚姻法の綱領をあげまた之を釋義し終り之を批評したるなど殆んど餘す所なし特に每章の議論はみな歐米各國の現行法律を列擧しまた間ま吾國の條例沿革をも示したる後ち着々その意見を開陳さるゝ如き其論法甚確實なり今や婚姻條例將に設けられんとして而も民

間に其案を議する者なし故に吾人が此書を得たるの喜びは一層の深を覺ゆるヿ也

女子必讀　批評前號の續

○人の善事は其人に對してこれを擧むるは諂諛に近し若し擧むべきヿあらバ他人に對して讃賞するを可となす其人の感ずるヿ却て多かるべきなり上の四十六頁

○雇人に事を命じたる時假令ひ主人の氣に逆ふことあれバとて怒りて其命じたる業を止めさするヿなかるべし若し之を止むるに於ては己の罪過なるをも省みず却て怨を主人に結ぶヿ深きものあり此れ其人に雇はるゝ如き者は概ね未だ道を知らざる者なれバ初より之を憐み宥めて扱ふべし上の七十四頁

○雇ひたる人無禮の妄言を吐くヿありと雖も其場所に於て直に之を責るヿなく宜く早く目前を去らしめ殆んど忘れたる如くに捨て置くべし而して後日に至り此者が平生よりも能く働きたる時を待ち靜かに前の事を言ひ出して辭短かに其理否を說くべし必ず心に服するヿあらん上の七十四頁

○賓客を招待する時家人の衣服は殊に華美なる可らず或は賓客をして己が衣裳の陳惡なるを羞て大に快からざるの念を起さしむるあり心得べきヿなり上の七十六頁

○時を定めて小兒を睡らすべし又之を睡らするには乳房を含ましむるヿ勿れ而して母親と寢床を別にし始より獨臥するやうに慣らすべし此の如くなす時は母もまた時間を費やすの妨なく特に小兒の生育に於ては獨臥するを最も利ありとなす中の三十頁

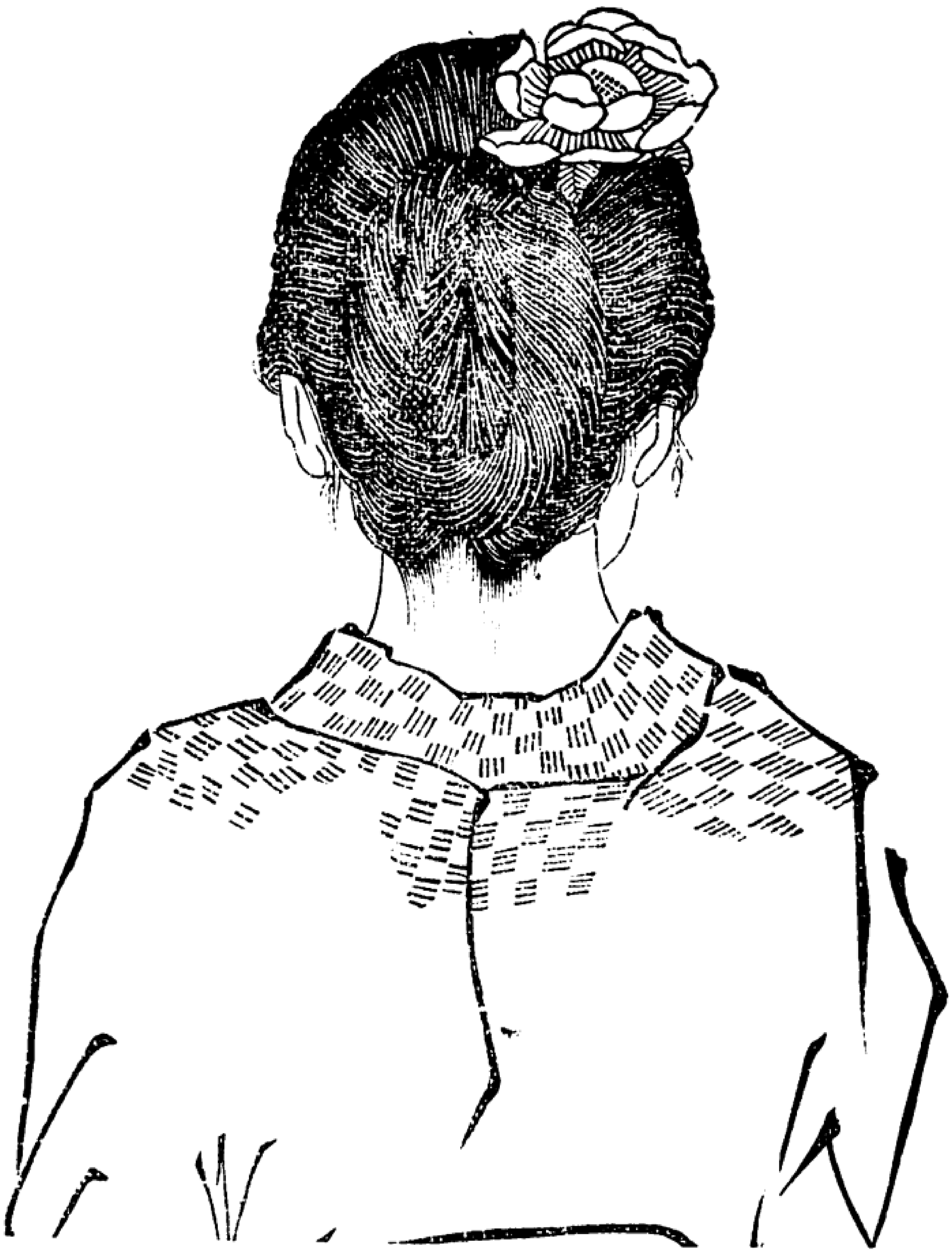
○小兒の枕は決して高に過るヿ勿れ脊骨を屈るの恐あり又低きに過るも宜しからず腦髓に血液の澁滯を來すものなり而して之を臥さしむるには仰臥を可となす側臥、俯伏、等何れも身體の發育に害あり中の三十四頁

○人は生れながらにして文字を讀み或は算盤を彈じき未だ敎へざるに善惡を差別するの智慮ある者にあらず然るに母は小兒の正き事をなすは當然なりと心得て少しも之を擧めず其過誤あるを笑ひて才智なき兒なりとなし唯惡きことのみ叱り咎め又或は學問などの進みの遲きとき汝は鈍きものなりと常に之を詈り譏れバ小兒の心氣は次第に狹く且つ衰へ終に自ら愚なる者となるべし中の七十二頁

○絹布は染色によりて之を洗ふ水をも異にせざる可らず紅色の絹は小麥などの糠を入れたる熱き湯にて洗ひ或は白湯にて濯げバ色變はらずして汗を去るべく又黑色の古絹は燒酎

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を以て洗濯し紫色の絹は灰水の熱湯を用ひ青色赤色には石鹼水に少許の酢を加へたるを良とす若し油汗のある時は先づ雞卵の黄處を以て其場所のみを捺り洗ひ然る後全部を水に入て洗ふべし但し糠湯を製するには白き絹布の袋に糠



を入れ其上より沸湯を灌ぎて揉み出すべし（下の四十頁）

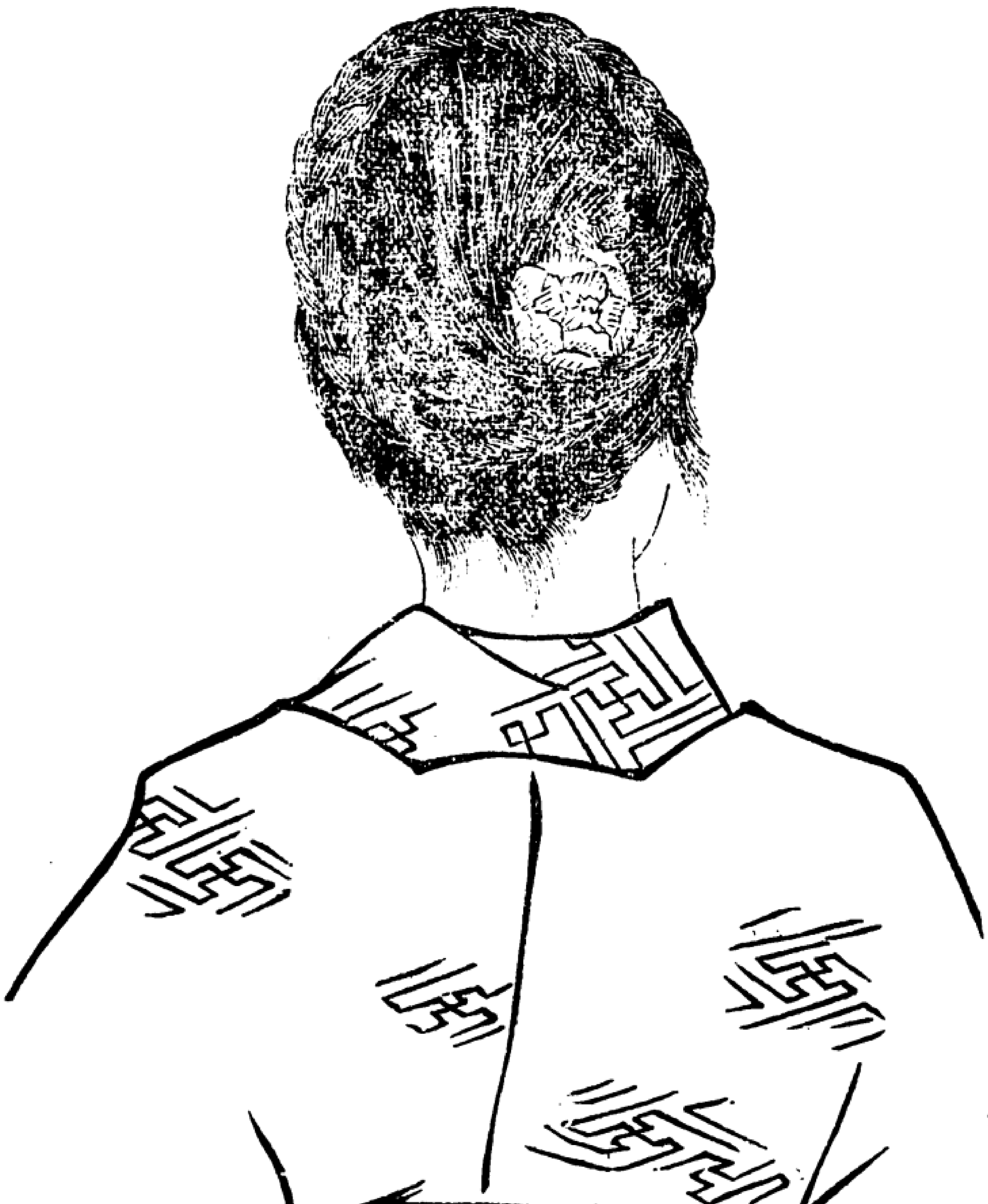
○身躰に汗の發したる時は決して入浴す可らず時として命を失ふことあり（下の六十七頁）

此外數多あれども大抵此樣の數を以て全卷を充せり女子必讀の名に反かざる者と云ふべし故に吾人は此良著を得たるの喜を著者に謝し併て吾讀者の之を一讀あらんことをすゝむ

坪内雄三君譯朗蘭夫人の傳は次號に批評すべし

○束髪圖解（五）

渡邊鼎



○上に示す第一圖の如く結ぶには根元より圖の如く扭り後ち又根元へ反して卷くなり而して殘り毛のさきは根元へ堅く卷きつけヘヤピンにて止むべし

○下に示す第二圖の如く結ぶゝは根元より二つに分け之を二

とも三うちに編み兩方のはしを以て圖の如く頭の周圍に卷きつくるあり此結び樣は甚だ活潑に見ゆるゆへ十七八の女子にはよく適するあり

○左に示す第三圖の如く結ぶには根元より例の如く三つに編

み左へ回轉し其毛の殘りたるを亦た根元へまきつくるあり而して後ちへヤピンにて根元及び垂れたる輪などを止むべし此の結びやうは毛多くして而も毛足の短き人によく似合ふものあり

●論説

○女子教育策の一端（第二編）。

中島俊子

以上既に學齡前の教育を說明せり而婦人既に學齡に及んで學校に通學するも又ハ入塾するも又ハ何れの點に於てするも兎角に其父母なる者女子が其學の半途に於て偏に佳人短命才人老るの憾みを抱き女子を持つ處の父母ハ唯一念に嫁期の晩れて好機を愆たんことを恐るゝの空氣ハ早くも其女子の呼吸感染する處となりて心意を泰然學事に委ぬる能はずして宛も春風の落花を趁ひ流水の逝て止む可らざるの思ひを做し暫く甲の學校に入り其進步の速かならざる時ハ乙の學校に入り又意の如くならざれバ丙に入り丁に入り此の如くして數年間を經過し去りて已れが爲す處のものを回顧すれバ唯匇忙の煩絮を嘗むるのみにして終に教育の芳味に深漸する能ハざる者多し是を以て教育を受くる處の名あるものと教育を受けざる處のものと齊く人の妻となりて後強て其教育を受けしものが大に異なりて教育の光輝を發せざるものハ多くハ數年の歲月を靜心平意に教育上に費かざるより却て他日多年の歲日を遺憾に經過せざれバ能ハざるの不幸を免れざるものあり是れを以て父母其初め女子が學校に入るの日に際して之れを輕ふに付擲

す可からざるなり預め能く其學校の如何と其女子資性の如何とを詳びらかにして而る後入校せしめ以て明かに其學校の宜しからざるを指點するに非れバ容易に之れを變す可からざるなり

世の以て名譽とする處のものも世に隨て變するものなり昨日の非とする處のものも今日ハ以て之れを是とし今日の是とする處のものも亦以て明日非とするに至るも知る可からず而明日の非とせられんとを恐れて今日の是を取らざる可からず見よ往日にありて最も父母が名譽幸榮なりとせし處のものハ則ち女子が唯富家に早婚するを得るの點にありて毫も他日の禍福如何を顧慮せざるものハ即ち名譽のもつて然らしむるものなり

女子を持つ處の父母ハ一般に隣家の女子が二九の齡を以て嫁すれバ吾が子ハ之れに先し二八の春を以て歸がしめんとを希ひ敢て女子が其半途に於て鴛鴦群を失ひ芳契空く消ゆるの悲嘆を念ハす人間の大禮を倉卒裏に整へ或ハ月下氷人の甘言に陷るが如き例ハ世に少なからず女子も其父母の情を斟量し未た全く乳臭の痕を絶たざるに既に人の妻となるの支度を爲し且つ婚事の如きに至りてハ唯一取て以て父母の意の如くするものにして其間に喙を容るゝハ女子が貞順の名に負くの思ひを抱き少しも好惡己れの意見を述るを得ず其幸と不幸ハ紙鳶の空中に浮沈するものゝ如し而其浮沈ハ皆風次第なりと明らめて居りしハ往日の時代の事にして今日ハ唯早婚を以て名譽となし意見を述べざるを以て貞順となす如きの時代にあらさるなり

抑も今日女子を教育するの大目的ハ決して唯奇怪なる學者を作るの望みに非ずして而良妻を作るの目的なりと謂ふ可し然るに未た良妻となるに足らずして既に人の妻とならしむるハ遺憾千萬と謂ハざるを得ず然りと雖も余敢て徒らに婚期を緩くして雲鬢の澤を失し花顏の紅を殘ふに至るも意と爲すに足らずと言ふに非ず素より婦人ハ自ら其好機のあるものにして縱然ひ才の恃む可く色の誇るに足るあるも其好機の忽かせにす可からざるハ言を待たざるなり然れども女子をして普通一家を主宰するに足り赤兒を養ふに足り交際を爲すだけに教育するにハ敢て多〻の日月を費すを要せざるなり

前章に述る如く往年に於てハ以て名譽とせし處のものも今日ハ既に之れを名譽とせざる世の變遷に遭遇してハ父母の慈悲ある者の點も之を一變せざる可からず他日ハ兎も角も一朝の

榮華一夕の寵幸をして女子の身に蒙らしむるを得れバ即ち父母が一最大の慈悲ありと感ぜり是を以て僅此の一朝の最大慈悲ハ卽ち他日女子が飜て一最大の慘嘆を感ずるの場合なき能ハず女子が縦然ひ閉花羞月の美あるも此れぞ卽ち一朝の艶色にして固より風雨の猥藉は到底免れ能ハざるものあり若し女子にして閉花羞月の美のミにして他に取る處あらざる時には其色衰ふるの日に至れば宛も新鮮なる魚肉の腐敗せしもの丶如く誰か之れを食するを得んや然れども女子をして兒を育ふ最も甘き家を處する最も宜しき或は之れに加ふるに他の伎藝あるを得る時は猶容姿の憔悴を償ふに足る可し既に老たるの色を補ふに足るの才藝は以て夫婦の愛情を永くに補綴するに足れり

今や世の父母の子に向ての慈悲とする處のものも蓋し此の如き點にあるならんと信ず然らは決して前日の名譽は戀ふ可きものに非ず而前日の慈悲は將來の慈悲となす可きものに非るあり是れ廣く世の父母に望む處のものなり而其婚事に至りては號を逐て詳記する處あらんとす

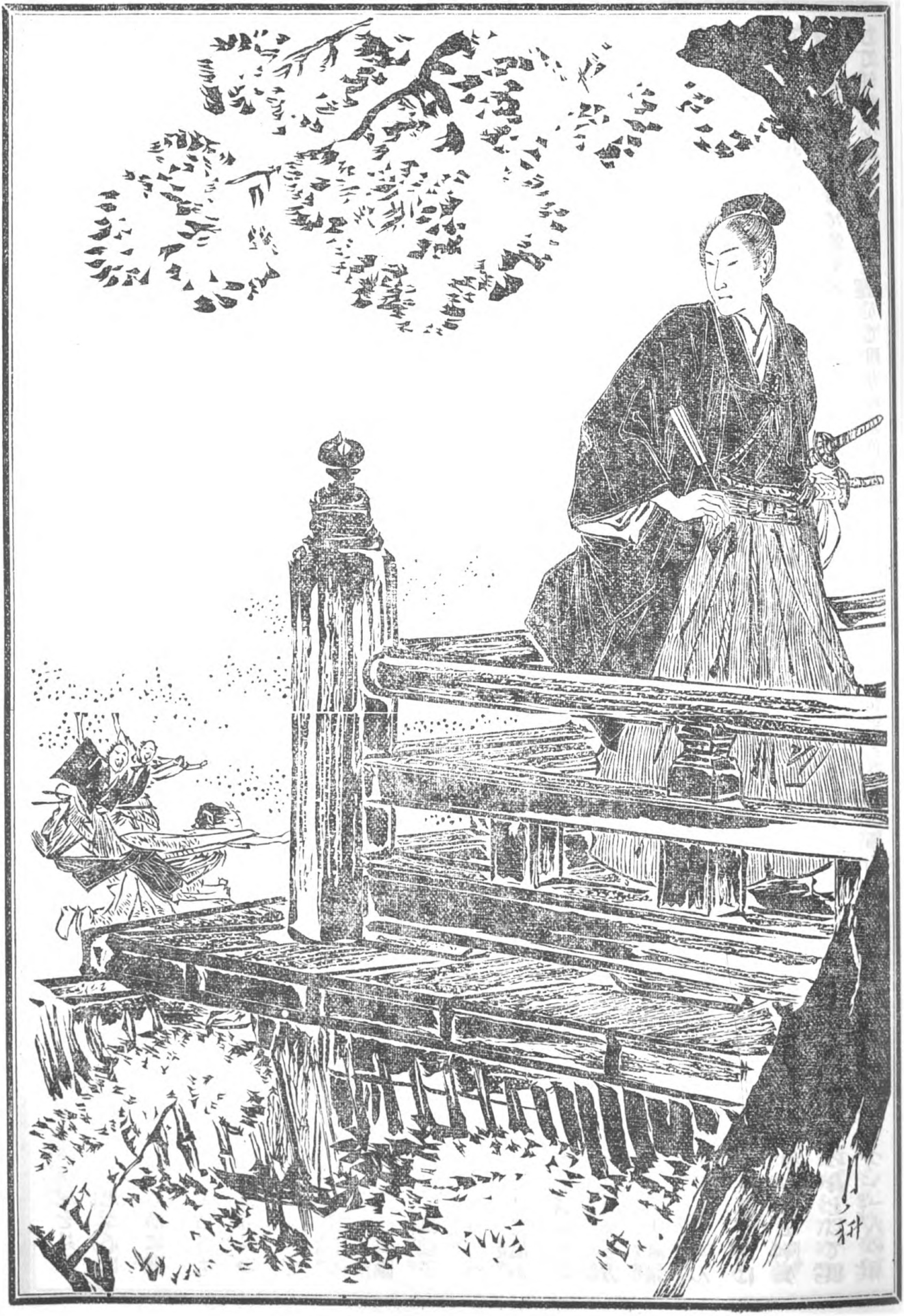
右女子敎育策の第一篇ハ本誌第廿六、八、九の三號に分載したり○又レビット夫人の論文續稿ハ次號に讓る

●佳人傳

○松島佳人の傳（第一回）　玉堂の主人　錄

嘉永安政の頃天下の志士王權の振はざるを慷慨し忠情を荷ふて四方に奮起せる者當時多くは災厄にかゝりて怨を青山の土に殘し空く後天を望んで恨死したり然れども其芳名は維新の仁政と共に發輝し疇昔の熱血よく明治今日の人心を鼓舞するもの甚だ多し是れたゞその心を慰むるに足るものなり然るに彼の家里新太郎氏の如き伊勢松坂に蹶起して勤王の義擧に先驅し一生を忠君愛國の事に任じて終に輕躁者の刃に落命したりと雖も今日尙ほ之を知る者の甚だ少きは尤も憾むべきなり希世の秀才既に然り況んや此の秀才を内助してよく其志を確うせしめたる彼の佳人をや其名ともに沒して世敎に裨補するなき亦あやしむ可らず伊勢新聞の之を歎じて家里氏の事を傳す實に賀すべきあり余は同氏の遺族を知り且つ同氏の志を追慕するものあるが故に玆に彼佳人に關する一二の事を傳して少か余が志を成すべし但だ其事實につきては伊勢新聞に記したるものと差違なきのみにあらず大抵之によりて筆を起せり故に先づ之を謝し併て此傳の讀者に少補あらんとを望む

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY



伊勢の國松坂の白粉町に家里愈仙と云へる醫師あり博學にして慷慨の氣節あり夙に當世の政を歎じたれども生質羸弱なりけれバ獨り恨を呑んで日を送りたり然るに其一子新太郎は眉目俊秀にして怜悧の氣象あり早くも父の憤怨をきゝて密かに自ら期する所を定め十四の年津藩の齋藤拙堂先生の門に入り三年一日の如く勉學したれバ十七才の比には諸子百家を悉く渉獵して塾中ならぶ者なき程に秀でたり去れバ其年の六月師の許を受て京都に登り山本亡羊の門に入りてまた志す所を專攻し傍ら頼三樹なんど云へる名士に交を結びてをさ〳〵當世の景勢をも談論したり。攻學に餘念なき新太郎も或日その鬱を散ぜんとしてたゞ獨り清水のあたりを吟行したるに堂前を過る比ろ旅の人と見ゆる三人の親子あり一人は侍らしふ覺へて他の一人は其妻なるらん十六七の容色よき娘と都めづらしう遠近をながめ居たり今ま新太郎が其傍をすぐるとき女房そと娘の袖ひきて見するは倜の美少年をと言ふにやあるべし娘は密かに其方を打見やれバ正に是れ秀眉玉顔の好男子温として且つ威嚴あり扇子づかひに夏の暑さを凌ぎて落々傍人に懸念せざる其さま甚だ愛すべく見へたり妙齡の佳人此時心緒果して何如ん新太郎は壇を登りて四方の景色を望み無限の感慨に時のうつるを忘れたる樣なりしが風と壇下の掛茶屋を見れば復た最前の旅の人々と面あはせたり彼の人々はと思ふ心にながめてあれば其傍にまた四五人の京武士ありいたく酒に醉ひたるやうなりしが倚ほ連りに瓢の首かたむけさして舌うちせりその中ちの一人彼の旅侍にむかひ其處に居玉ふは御身の娘子にやあらん暫時借用して吾等の酒宴に御招待し申さんと譯も分らず言ひつのれバ旅侍少しく怒をふくみ吾等は旅中の人にして足下等の御相手仕るべき者にあらず此義は全く御斷り申す、ナニ御身等が旅人とは言へども承知いたせり御娘子が餘り美人にましませバ達てお酌を頼むなりサア〳〵此方へと早や立ちにかゝれバ旅の侍くわつと憤怒し醉人と見て温かにおいしらへば無禮極まる理不盡の所行ならバ用捨はいたさずとて刀に手をかくれバコヤツ中々剛情なり先づ其親から方付てお仕舞なされ左樣さやうとよろめき乍ら三人の武士亂暴に打てかゝるそのひまを見て殘る二人はかの娘を擁し走らんとするを止る女房さけぶ娘まことに危急の場合なり新太郎はるかに此樣を見て奮然身を起し刀追取て飛ぶが如く走せ降り乍ら二人の武士に出て合ひたれバ假りにも武士の身を以て狼藉なすと奇怪至極こしぬけ侍そこ動くなと罵りつゝ一人の肩

先丁と打ち斬てかゝるを動と蹴たほし早くも娘を後にかばう凛たる少年の働きにこれ適わじと逃げ出せり娘はやう〳〵正氣にかへりて塵うち拂ひこれまことに再生の恩人御禮の申やうも御座りませぬと見上ればこれかの少年なり嬉しきに先だちて恥かしきはすべての娘の心あるべし其中に旅侍の夫婦も來りてあつく其恩を謝し御陰によりて親子ともに恙なきを得たると御禮に辭なし尊名いかに名乗らせ玉ふ具さに御きけ被下たしと申せば新太郎ほゝゑみて此しきの事何のお禮に及ばん御傷もなくて何より重疊私はこれより御暇申さんと別るるを強ひて引止め然らバ吾等ハ三條の芳野屋に宿かるものなり何卒歸路に御たちよりありて切て一酌の寸志をうけられたし曲げてまげてと促すにぞ新太郎サラバ御厚意を辱ふせんとて連れ立ち行きけり

芳野屋の宿り廣きにあらねど親子が今日再生の恩を謝するとてたゞよろこばし氣に取扱ひ早くも酒肴を命じて連りに之をすゝめたり半バごろに至りて彼の侍あらたまりて云ふやう

サテ斯く御近附となれバ何を隱し申さん私は土佐藩の者にて筒井某と申すものに候が此度藩主の內命を蒙むり西京見物を名として參りたると、、、、、、サ斯樣の次第ゆへ諸國の浪士書生中末頼母しき人とあれバ道をもとめて交を結べり今日ハ頼三樹三郎氏と御身を見違へ其膽力をためさんとて娘等にも申きけかゝる御面倒の御世話に預りしが義あり勇ある御身の働きにほと〳〵感服仕りぬ吾等の志かくの如し何卒向後末ながう御交を乞ひたし

サテモ此は愉快の事でした左樣の御方とは存ぜず僅かの力だめしに御禮を甘受したるハ反て汗顔の至りで御座る御志の次第は吾等の尤も御同意する所あり何卒共に力をあはせ奮勉いたさん

娘よ御酌をせずや、イヤ酒は甚だ不調寶で、

コレは愚女勝と申すもの何卒御ゑんりよなく御酌を命じくだされ

新太郎は好意と愉快とに心動きて連りに飲まぬ酒をも傾けつ倘ほ志をかたらふ中に最前醉だほれよハむしと罵りたる五人の武士も笑ひ乍ら席に來りつ暫しまて頼三樹三郎は世古格太郎を伴ひ家里が此處にあるよし坂本龍馬にきゝたれバ一寸御尋申すとて來りけれバ此はまた非常の好會なりと席に通じ今日の爽快何者か之に過んと胸懷を叩き談論したり(未完)

ナイテンゲールの傳續稿ハ餘白なきに付次號へ讓る

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●寄書

○女學雜誌を批評し併て誌上の貴姉に一言す

府下麻布北日下窪町　大石さかゑ

妾つら〳〵當今の狀況を見るに今や文學日に進み月に化して止まる所を知らず女學擴張も亦頭々として隆盛を極るに至りしハ畏くも我　皇后宮の聖思に基づく所と信ずさるからに苟も佚遊に甘んじ徒に技藝を玩ぶ時にあらず過日偶ま女學雜誌三十三號を讀むに其文意高尚信切一も淫猥邪說を見ず加ふるに江湖の女史諸君子の投書あり寶に女子教育の盛なる時に際し一大美事と申すべし本紙の愈よ號を重ぬるに從ひ愈よ盛大ならるを祝す妾ハ生れてより十四の年月を無名無聞寧ろ世に益なくして空しく過せしを嘆ずこれより鈍筆をふるひて龍尾に加らんと欲す然ハあれども固より淺學寡聞にして言ハんと欲し言ふ能ハず筆さんと欲して筆する能ハず四方の女史達よ願くハ拙文を笑ひ玉ハずます〳〵妙筆を揮ひ志想を叩き精神を吐きて誤を正し妾等に從をあたへて螢雪の助となし玉ハんとを願ふ

○蝙蝠の說

小石川小日向町長榮女塾　島浪江

妾一日晚餐の後科業の暇軒端に出てゝ凉を納ふる時將さに黃昏ならんとす會〻無數の蝙蝠軒前を翔翺して蚊を捕ふるを見る彼れ獸を以てこれを視れバ則ち双翼あり鳥を以てこれを視れバ則羽毛なし故にこれを鳥獸の類に班すべからず而して其出沒飛騰亦晝ならす夜ならす必す晝夜の間に於てす眞に天地間の一怪物なり人間社會亦たこれに類するものあり學士を以てこれを視れバ則ち識なく俗人を以てこれを視れバ則ち迂なり故に識者鄙んして友とせず世俗亦迂なりとして交らず煢々孤立雅俗の間たに出沒して或ひハ漫ろに德義を說き或ひハ工みに射利を論じ其間以て銖兩の利を博せんと欲す眞に人間社會の一怪物なり世人學ぶに道によらず行ひ法に則とらざれバ則ち必す此の類の內に陷沒せんとす偶〻感するところあつて蝙蝠の說を作ると云爾

○智識は失敗より學ぶ說

橫濱フェリス女學校　佐藤てつ

日々奇物を知り月々異物に遭ひ年々新見新聞委積して止まざるハ其れ智識を開發する本歟之を大に徵してハ文學巧藝進步して止まず古來の眞理と確認したる定論も今世否認す即ち天動說の地動說と變したる如き是れなり小に徵してハ昨是も今非とす即ち封建の郡縣となり漢醫の洋醫となるか如き是なりこれ皆智識進步の致す所よして古人の遭遇經驗の今人よ如かず昨日の今日に如かざればなり而して其經驗遭遇の際に當り失敗より智識を學ハざるハなし譬へば無智の嬰兒の火に顚跌して手足を焦爛それバ其火の酷熱なるを知り木石に衝突して頭口を毀害すれバ其木石の堅剛なるを知る而して獨嬰兒に止まらず古今智者識者と稱する者も蓋世の勇將も古今未曾有の機械を發明し國家に鴻益せし者も一朝一夕にして功を奏せしに非す一失一敗に至る每に自ら思慮の足らざるを諭り益奮勵技を究め術を盡し千辛万苦して終に其宿志を達せるに非すや是に失敗なければ智識の由て出する所を知らざるなり又余が常に經驗せし所に據るよ失敗せずして得たる智識ハ永く存せず失あり敗ありて翻然として自己の足らざるを諭り其高域に

達せんとするの念慮饑者の食を求め渇者の水を呼ふが如し此れ失敗の知識を學ばしむる所以か而して失敗して智識を學ばさるは何んぞや失敗の為めに撓屈せられ堅忍豪剛の志向なきを以てなり夫の項羽の敗を取るや曰く天の余を亡すなり戰の罪ヰ非すと是自ら反省するを知らざる而已ならず亦智識を學ぶを知らざるに由るなり若し羽をして堅忍不抜の氣あらしめば其結果如何そや天下は必ず漢の有にあらざる可しコロンブスの大業フランクリン氏の大發明の功を奏せしは何んぞや確乎不抜の豪氣あればなり若し此の二氏をして半途にして百失千敗の為めに屈撓せしめば其不世の業も烏有に歸せしならん而して能く宿志を達せしは豈に智識を失敗より學びし所以に非すや是に因て之を見れば事を為して失敗を取るは亦幸福を得るの本なり

○祝文

麻布英和女學校　丹野ふさ

歐米の文化一たひ吾邦に輸入せしより百般の事物一として改良進歩せさるはなし就中女子教育の進歩に於ては尤も著しく現に其教育を專任する學校の如き一東京府下に就きて算するも其數枚擧に暇あらす誠に盛んなりと云ふ可し然りと雖凡事始より整備を得る者は殆と稀なり女子教育の整備に於ける固より一朝夕に辨す可に非らすされを以て其學校の建設斯の如く多しと雖其基礎の强固にして規律の嚴整なる學科の完全にして教授の懇篤なる者を擧くれは果して能く幾何かある麻布永坂の西畔爽塏の地に一校舍の巍然として實際に聳へ宮商の音咿唔の聲朗々琮々自から人をして其進むを樂しんで退くを得さらしむる者は即ち妾か今立つ所の此東洋英和女學校是なり抑々本校創立の日を去る未た二歳ならす而して學生の多き已に百數十名に及ひ去歳の夏校舍增築の擧ありしも今や生徒講堂に滿ち頗る狹隘の感あり故に陸續入校を乞ふ者あるも悉くこれを謝絶せらるゝに至れり夫れ僅々の歳月を以て隆昌の速なる斯の如き者は何そや顧ふに世人の教育を重するに由るなへしと雖要するに基礎の强固にして規律の嚴正なる學科の完全にして教授の懇篤なるに由らずんはあらす是れ妾の暢論を俟たすして明かなり

然り而して妾か如き庸劣なすに足らさる者亦懇篤の教諭を忝ふし日に月ヰ歩を進むるの甚た難きに非さるを覺ゆ竊かに以て幸となす顧るに世の有爲の資を懷ける姉妹にして入校を望むあるも既に定員に滿つるを以て謝絶せられ其志を空ふする者多し妾爲に憾なき能はす主任の諸君早く爰に觀るあり本年夏期休業間を以て更に校舍を新築し生徒を增員せらるゝ計畫全く定まると聞く

嗟呼本校諸君の意を教育に注かるゝの厚き既に斯の如し學生たる者誰か勉嵩せられんや他日必す優良の女子聯翩背出し本校と共に美名を輝さんとを企して待つへきなり爰に夏期閉校式の末班に列し欣躍の情自ら抑ゆる能はす聊か感する所を記して以て祝辭に換ゆ（七月某日）

●正誤　前號の英詩中植字の誤多し左に之を正す

Errata in "In Memoriam" inserted in the last Number:—

In the 2ed Verse, "Sin" for "I'm"; 3. "Affeminate" for "Effeminate"; 5. "Glary" for "Glory"; 11. "Unallayed" for "Unalloyed"; 12. "Lonely" for "lowly," "Ere" for "Er"; 13. "Younder" for "Yonder."

●寄書　淸水繁三、菅谷本二郎、藤本正之、白井某、等四氏の婦人授産策。淫みさを子の詩。武山春二氏の女子自立說。多藤新助氏の答及古事。貧女生徒某の問。正に落手仕候

●新報

〇在留記者の道德　西洋人と交際して得たる我日本國の利益は有形に無形に皆な甚だ尊むべき者多しと雖も吾人が特に重大の事として大に慶賀する所の者は爾來我國人の道義の大に進歩したることなり吾人豈に之を西洋の貴女紳士に謝せざるを得んや然るに在留せる洋人中その同國人が日本に輸入せる斯かる美學の存するを思はず亦た吾國民が之を感謝するの美德あるを思はず反つて此を罵りてその國人が打立たる美學と此が爲に養成したる吾國民の美德とを打ち破らんとするは此れ將た何たる衬流の人ぞ蓋したゞ道德上の罪人たるのみにあらず實に其本國に對するの愛國心だもあらざるもの也。さきに東京インデペンデント記者社會の罪惡を滅すべき事を痛論して近來新に流行する踏舞を輸入する輩を責めたる時メイル記者は之を一笑したり此頃外山正一君その演劇改良論私考の中に藝妓を鹿鳴舘の樂會に入席せしめたる事を擧げて斯る下等人物の公行を太たく責め玉ふ時メイル記者また之を一嘲せり先日神戸に婦人禁酒會を設立し數多の貴婦人熱心に禁酒主義の擴張に盡力あらんとするやヘラルド記者之を一罵せり、あゝ如此き外國記者ハ我國に在留して果して何事をか爲さんとする我日本國の道德を陷れんとするかその同國人の美學を破らんとするか吾人ハ實に之を奇しむもの也吾人は我同流記者たるもの丶此如き人物を筆責して容謝あからんとを希ふと共よ在留せる貴女紳士等の亦ひとしく之が芟除に盡力して其の忠誠を公露あらんとを望むもの也

〇女學雜誌への注意　去七日の絵入朝野新聞にハ吾女學雜誌を太く賞賛して社說叢話其外何れも精選の記事のみあれば婦人必讀のものといふべし然れども惜らくは記事嚴肅にして獎勵訓誡に余りあれバ慰諭解頤の法に乏しとあり。又今川小路の東雲堂主人は本誌に子供の敎の一段を加れば更に完全すべしと云はる。松代の大竹常業氏常陸の花町よふ子は態々書を寄せて本誌を賞し且つ文章を更に平易にそべきやう敎らる。何れも皆な親切の御注意なれバ吾人ハ編輯の際座右の一箴と仕るべし倘其外示敎を惠まるゝ讀者あらバ幸甚なり

〇女學校　明治女學校にハ松山髙吉氏を聘し時々和文の講話を生徒にきかする由。横濱のフェリス女學校は近頃渡來のコルテス娘を聘して敎師の中に加へたる由。髙等師範學校の女生徒は自今洋服を着せしむ但し絹及レース類金銀寶石等は一切用ふるとを許さずと訓示ありたる旨去九日の官報よ見ゆ尤

も賀すべきことなり。備前岡山東中山下九十一番地に今度山陽英和女學校と云へるを新設し女德と女學とを併せたる眞正の婦女を教育するよし其設立趣旨書及概則等の寄送ありたるを見るに尋常の女學校にあらざるを知る吾人は向後時々其校の景況を報道すべし但し岡山縣の知事は此校の學科中修身の課に聖經を用ゆる事は追て何分の義相達候迄適用相成らずと指令ありたるよし此れ何の故たるを知らず一の惜しむべきことと云ふべきのみ

○横濱婦人慈善會　今度同會にて慈善金を募んとて美術會を開き書畫會を始め其他美術品を展覽せんとの企にて沖知事にも大ひに盡力し會員にはいよ〳〵右方法幷びに委員撰擧の爲め來る十三日午後四時より商法會議所に會議を開くよし此會には外國人も同意して秘藏の美術品を出さんと約する者多き趣きなれば定めし珍品の出ることならん

○婦女皆な爭鬪者　愛耳蘭ベルファアスト府にて近ごろ舊教信徒新教信徒の間に爭ひを生じ市中に於てはその爭鬪のため馬車を見ざるに至る實に警官巡邏兵士のなくば忽ち一の修羅場を現ずるならん其間婦女子は万一の用意の爲め市街に小石を積み重ね舊新兩徒の相遇ふて爭鬪を始むる時は婦女子は熱心に小石を運搬し男子よりも必死の決心を顯し一少女の如きは戰場にありて頑石雨飛の中をねまきのまゝにて從容として往來せりと然して市中の婦女は其爭鬪を自己の職業の如く見做せりとぞ歎ずべきことなりと朝野新聞に見ゆ

○淸帝后妃を擇ぶの法　左の一篇は淸國皇帝がその后妃を擇ぶの仕方なりとてニューヨーク、ヘラルド新聞に記載したるものなるが多少造り話らしき處なきにもあらねど兎に角く珍らしき話しなれば譯出しぬとて時事新報に見ゆ

今の滿淸愛親覺羅氏が支那帝國を一統せしより代々の天子は孰れも八旗の氏族中よりその后妃を擇び出すことを例とせりこの八旗の氏族は二百年前滿淸祖先が韃靼より起りて大明に侵入し終に四百餘州を討平したるとき終始征討に從事して戰功を顯はしたる創業の功臣達の子孫なりといへりさてこの氏族たるものゝ死生婚姻等に關する事柄は一々その日附を記して之を各省の官衙に納め置きこの氏族中にて十二歳より十六歳に至るまでの女子を持つものは年の四月一日を期して之を携へ北京に上るべき命を蒙るなり愈よ當日とあれば其の前夜右命に應じて上京したる女子はその父と共に何れも粧ひをなしたる馬車に打乗りてその日の曉方に皇居の北門より參內す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れば少らくありて皇帝は母后に伴はれ大勢の宦官を随へ便殿に出御ありて女子の年齢及び姓氏を記したる木札を載せ置く所の卓子の側に座を占められ手づから右の木札を取擧けてその表に記したる女子の名を讀上ぐれば宦官に件の女子を皇帝の御前に連れ來りて叡覧に入るの間其の父及び其の省の總督は女子の後方にありて平伏し以て命の終るを待つ皇帝はその女子を前に直立せしめその姿態容貌を熟視したる後更に辭を掛け又その父及總督にも女子の身の上の事を種々問ひ尋ねらるかくてその女の皇帝の御意に入らざるときは名を記したる木札を屑箱の中に擲棄て手を以て彼方に拂ひ去り又御氣色に叶ふときにはその叶ひたる度に隨ひ一二三等の點數を付しその順席に隨て木札を卓子の一邊に取置き一々此の如くして撿査の式終れバ女子及落を論せず銘々京城の客舎に歸り休息して命の下るを待つかくて其後四日經るの後に至り御意に叶はざる女子は郷里に歸るべきの命を蒙り又皇帝の御目に止まりたる女子は數日の後再び精密なる撿査を受くる事となりこの時にはその中より皇后及び妃嬪二人其他三十二人の後宮を撰出するなりとぞ

○長野縣養蠶　の工女は人員凡そ一万四千〇六十七人にて賃銀は大抵一日十錢ほどなりと云ふ

○求婚の廣告　西洋には婚姻を求るの廣告毎度新聞紙面に見れるゝとあれども吾國にては此の比ろ時事新報に見へたる某書記官の廣告を以て始めとす

○教育會の懸賞問題　大日本教育會にて今度其名譽會員たる某氏が賞金百圓を懸け左の問題を出したり尤も答案は來る廿年二月を限り同會へ寄送する筈なりとぞ

男女文章の躰を同一にするの方法（本邦從來男女文躰を異にするを以て例となす此文章の躰を同一にするハ如何なる方法によるべきか其詳細を記述するを要す）

品物を贈答する交際上の習慣を絶つの方法

右の二問に對しては吾人も亦異日論述する所あるべし

○小供に錢を持たす事　の可否は教育會にて久しく議論ありしとなるが過日の會議には其可否決を來會者に問ひたる末六十名に對する四人の少數にて遂に錢を持たすの可なるとに決案したりとぞ吾人は曾ても述べたる如く學校貯金の制あらざる中ゟ錢を持たすハ甚不可なり既に此制ありとせば亦た論を要せざる程に其利明なるとなれば斯く騷々しく議論する程の儀にあらじと思考したる者也

に相逢ふと雖も笑顔を開て相語り未た嘗て之を襯視せさるなり個は强ち情欲を遂けんと欲するが爲めよあらさるは吾人の皆自ら反して能く知る所なり懇親の宴親睦の會女子の杯酒の間に周旋するにあらされは眞に愉快を覺へさるものと見へ甲塲乙會紅袖長衣の形影を見さるもの幾んと希なり其男女情を通し好を約するの間にありては一艶言以て男子鐵石の心腸を蕩かすに至る其勢力の大なる驚くに堪へたり前章勾當内侍の一纎手義貞十万の兵を留むるの類なり然りと雖も女子に此勢力ありとせは男子にも亦此勢力なかるへからす唯女子は世間の大事に當らさるか爲め人の耳目に留まる程の事あらさるのみ日夕裝鏡に對し粉を傅け影を顧みるもの男子の寓目を待んか爲めのみ然らは男子の女子に於けるの好尙を變するときは忽ち女子身邊の粧を動かすに足るへし近くは東京の或學者が婦人束髮會なるものを起し女子結髮の改良を圖るや天下の婦女子は靡然として之に嚮應せしは掩ふへからさるの事實なり今余輩が男子の好尙を一變するとは此類の事をいふなり

偖天下の學者に於て此束髮會の如きものを設けて遊藝上の好尙衣服上の好尙或は品行上の好尙と看板を掲けて天下に公示せは婦女子の思想を感動して女子敎育の策として大に效益をを見るへきなり

第八章　結論

余輩ハ數章を重ねて女子敎育の策を論出し今や筆を擱くに臨み尙一言を加へさるへからさるなり抑も讀んで首より尾に至り其今日に行ふて不便を見さるのみならす能く時弊ニ痛切なるを感するなり唯婚姻條例の制定に至りては世間異論なきを保せす如何んとなれは我國婚姻の弊たる年來の慣習にして一朝之を匡濟せんとするにハ多少物情を喚起するやも圖るへからされハなり然りと雖も我國婚姻の弊特に早婚に止まらさるなり女子今日他人の家に嫁し其舅姑に承順し其子弟を愛撫するや一旦其夫の歡を失へハ粧鏡忽破れ離婚の凶事吾に至る恨を含ミ涕を呑み悄々として寡居の歎をなすもの蓋し珍とせす其年齢未だ壯ならす容色未た衰へさる者他日良緣のなきを患へさるも多年夫家にあり交情益長かりしもの日夕無聊長く不幸を歎するのみ而して之を保護するの法律なきなり故を以て男女二三回若しくハ數回の婚儀をなさゝるもの盖し希なり甚たしきハ旦暮其妻を易置すること奕棋を視るか如きものあり之を要するに男子ハ其權力を濫用して女子權力の區域を蠶食せるものあり而して其極社會の腐敗を來し男子も亦其弊を分擔するに至る早晩民法を制立して男女をして各其堵に安んせしめさるへからす余輩の所謂婚姻條例とハ此民法の一種たるに過きさるなり而して今之を實行するに就てハ天下の結婚者を强制して必す此法律に遵がハしめんとするにあらす此法律に遵がハすして婚姻を結ふものにハ法律ハ保護を與へすとのことにて是れ普通の道理なり然らハ甚だ世間の習慣を激することもなく自然に早婚の弊を絶ち又女子の地位を重くするものなり是に於てか敎育始めて完全の域に進歩するを望むへし而して勅令第十四號應用及婚姻條例制定の二項ハ男女敎育策の通論となすを得へし其他ハ今復說の勞を取らす天下の有識者ハ余輩の言に取るあらんことを至囑に堪へさるなり

（右にて甲點の論文終る）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●乙點

伊勢國多氣郡中村
小竹啓二郎

凡そ一事業を計畫するには先つ其事業の性質を討究し其境遇に適合せしめ一歩進みて又將來の境遇をも推測し其事業の爲めに害となるへきものを採り除き利となるへきものを撰ひ用ゐ綿密の上にも綿密を要してこそ始めて完全の結果を庶幾すへきなれ假令其處置理に於て間然すへきなきも其境遇に適せさるときハ恰かも正方形を以て圓形の箱に密箝せんとするか如く方形正なりと雖其器に適せさるを如何せむ由りて理法も實際に適して始めて價値あるなり實際に適せさるときは是死法なり骸骨なりと曰はるゝも又拒むことを得さるなり又譬実に改良進歩を計り只々其利を收めんとせハ思はぬ所に害芽生ひ茂りて折角豫算せし刈稻も大に其傷害を蒙むるに至るへし目今朝に計畫して夕に解散するの事業多きは皆最初の討究綿密ならさるによるなり其事小なれハ猶恕すへし苟くも事國家の運に關する以上は必ず輕々視すへきにあらさるなり健歩の歐長足の米競爭頻繁の時世に際し遙かに後れたる駑乘を以て之に追及し之に驀越せんとす徒に其跡を蹈み其塵に倣ゐ時に或は極端に走りて顚蹶するが如きあらば國の損耗果して如何そや必ずや熟思して其長をとり以て我境遇に適せしめ進歩の捷徑を馳せずは徒に其國資を費し奔命に疲れんのみ一意只彼よ模倣するか如きハ吾の大に取らさる所なり抑々世の事を擧けて成らさるもの其事業の成質を知らさるものよりは其境遇を討究せさるものに多く其境遇を討究せさるものよりは其害を慮らさるものに多し故に吾は理論に拘せず實際を計り其害を除き其利を取り以て我國の副造化（即ち後來人の母たるへき女子）たるへきものを教育するの策を講せむとす

一　女子教育の性質

人は教育すへき動物なり女子の教育豈等閑に附すへけむや併し女子の性質は自から男子と異なり智情意の中情の働き最も強くして慧敏にして能く綿密のことに堪へ且美術心には頗る富めるものなり故に音樂唱歌書學彫刻醫師幼兒保育教員及び其他過甚の勞力を要せさる細密なる事業（例へハ紡績家事經濟養蠶等）は實に女子に適せるものなり或は男女其智識は差異なし古より女子に英雄あり博士あり技藝家ありと曰ふ人ありと雖是千万中の一二を以て女子全體を證するものにして吾の甚た取らさる所なりよし假りに斯くあらしむるも女子の得たる所を捨てゝ強ひて男子と同くせむとするにも及ハさることなり其得所を修練して男子の能ハさるをなさしめ以て社會の幸福を全するの妥當なるに如かさるなり吾常に兒女を教ふるの際心を用ゐて考ふるに女子の慧敏なるは男兒に勝ると雖其剛毅なるは迚も及はさる所なりとの感を起すこと屢々なり故に之を教育するには小學教育の間にも自から手段を異にせさるへからず先つ後來女子の世に處する義務を擧くれハ先つ

第一其子女を保育すへきこと

第二其夫と共に世に處し家を治むる丈の智識德義を備へさるへからさることとす

此二つのものゝ社會に勢力あることハ實に大なり之を契説せむに子女幼稚の家庭教育ハ多く母の手にかゝるものなり此時期ハ全然其人の性質位置を定むへき程の勢力もあらされとも其

次期の敎育の道を開き敎育の手初めとなり基礎となるへきものあれば必ず輕々視すへからさるなり殊に德育などハ概ね此時期に關せり故に其毋たるへきものをして保育の理法を知らしめば敎育上大裨補たるへきと必せり又世の風潮に棹さす身ハ兩親親しと雖離るゝ期あり兄弟親しと雖共に居るへからず故に此間己の片腕とも思ふものハ妻を置きて果して誰ぞや其妻たるものをして智識道德あらしめば其稗補する所又大なるへきなり且妻たるもの別に事業を取るの伎倆あれば一家の生活豐融なるへく又ひきて社會の福祉をも增進すへきなり女子の敎育豈等閑に附すへけんや故に女子をして小學普通の敎育を受けしむるハ勿論のこと之をして其天然備ゆる所の能力を發育修練せしめ以て其身を立てしむるハ是輿論の許す所なり其方法の如きハ又吾輩の喋々を要せさるなり只之を我國目今の境遇に照し以て痛論する處あらむとす

二　吾國目今の境遇

吾は一問題を出して以て世人の注意を惹かむとす曰く智識の社會に及ぼす所の壓力ハ免るゝことを得へきものなるかと苟くも此優勝劣敗の世に棲息する以上ハ到底其壓力の作用を免るゝ能ハさるハ是童子も亦知る所なるべし此に於て余輩ハ轉た感慨に堪へさるあり蓋し智識の領分内にある礦山ハ無盡藏なり其礦脉堀れども盡きず益々其量を加倍するのみ此に冶工あり爐火焔々として礦を鑄る其狀樂むか如く誇るが如し憐むべし礦夫の未だ採堀し能ハさるもの常に其跡を追ひ及ハさらんことを恐るゝか如く空しく其片屑を拾收して只其巧妙に驚くのみ遂に冶工の爲に役使せらるゝに至る唉十九世紀の世運ハ愈其速度を增し智識の壓力ハ益々其作用を逞くし優勝劣敗の作用益々顯著なるに至れり苟くも國の獨立を計り其體面を維持せむと欲せば之に抵抗するの力を備へさるへからす其準備種々あるへしと雖吾輩ハ先敎育を以て其基本となすなり然れども吾國の敎育ハ年倘淺く未だ遙かに歐米の水平線下にあるものあり殊に女子敎育の如きハ其名ありて其實なしと謂ふも可なる程なり之を察說せむに一ハ從前の小學敎科學術に偏して少く實用に迂なるに由り其功果少なく一ハ是迄の習慣より女子たるものハ齡十二三に至れば其父兄よりして一意裝飾に意を用ゐしめ其幼稚氣を去りて極めて大人氣を附けんとし家事の手傳を口實として退校せしめ少しも其敎育の必要あるを感せず故に其女子も父毋及四圍の同朋に感化せられ之に甘して是迄修めたる學科（殊に注入的の授業なりければ妄失し易し）ハ悉く之を忘るゝに至る又下等社會の子女ハ多く不就學なり其上流完全の敎育を受けしものハ實に僅々のみ當路の諸氏荐りに勸誘すと雖習慣の病浸染すること頗る深く容易に治すへからさるなり故に我國三千八百万人同胞の千九百万人ハ大概無學者即ち夫の使役に唯從する下等人類なり鳴呼之を以て勒を歐米各國に並へむとす豈得へけんや近來頻りに婦女改良の說ありと雖是只上流一小部分の波瀾のみ其泡沫だも見さるもの是大部分を止むるなり吾輩ハ力の限り之か改良に從事し第二代目の婦女をして其禍に陷らさるやう歐米婦人に劣らさるやう敎育を施さんと欲するなり然れども是至難中の難事にして几上の空論ハ兎も角之を實地に施行するハ極めて大事業と云ふへきなり加之目今一般人心凋殘の時迚も完全の計劃ハ望むへからず夫れ虎を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

畫きて猶に類するよりは寧ろ鵠を畫きて鶩に類するの勝れるに如かず由りて順を追ひ境遇に應して之か計畫をなさゝるへからず

三　其利害處置（吾論する所は社會の大部分なり故に上流のとは多く言はず）

先つ手初めに其害となるへきものを除かさるへからず雜草を除かずして肥料を用ゆと雖其結果の豐穰を望むへからず俗に謂ふ「儲ける算段より費はぬ算段せよと」言守株因循に似たりと雖此心得なくば大事業の成果は迚も得難きなり由りて其害を除くへき策を左に條擧す

イ　從前の習慣を破るべし

一小學區毎に學區女子教育談話會なるものを設け區内の婦女を以て會員を組織し其家業の閑暇あるときを以て開會し兒童保育家事經濟其他女子の業に關する演說談話をなし以て女子教育の必用を感せしめ併せて其改良の功果を得むとす人民の厭ふ所は唯入費にあり此會は入費を要せず且田舍には多く佛教の說教等あり都會の地は寄席あり之を聽くが如き習慣を附けしむれば大に功果あらんと思はる會場は學校若くは寺院を以て之に當て演說談話は小學教師助手等其任に當るものとす是目今の時勢少しく行はれ難きか如しと雖諸中の心耐忍の力を以て之をなさば必ず意外の功果あるへきなり是吾久しく持論とする所なり

ロ　早婚を禁すへきこと

早婚の害あるとは吾言を待たす且之か爲に女子教育の時期を縮め其能力を暢發するの暇あらさらしむ早く結婚條例の發布を望むなり

ハ　演劇及新聞紙繪艸紙等說話仕組の材料を改むべし

其淫猥不品行の事柄を揭くるは是勸善懲惡の爲ならむかなれとも是大に拙策なり善事を示して善を勸むるは大によし然れとも人の情は大に同感の力強く（幼少のときは尙更なり）して惡事を見聞すれば其趣味あるに惑ひて多く之に傚はんとするに至る之により反省して以て惡を止むるは是余程の道理力ある老成人にあらされば能はさる所なり故に吾は曰く反面の者にして決して之を以て惡を懲らすの資料とするに足らずと人或は口實を搆へて曰はむ斯の如くば話柄說種なしと然れとも是豈平常の言ならんや

是より其利となるへきものを擧くべし

イ　裁縫を以て女子教育の端緒を開くべし

無智の人民を導くには其好む所によりて之か方便を施さざるへからず婦女子に於て紡績裁縫の必要なるを感するは是都鄙一般共に然る所なり故に各府縣下に一二ヶ所の裁縫傳習所を開き志願の婦女を募集し併せて家事經濟育兒法家庭教育の大意等を授け之を各地方に派遣して子女を教へしめば必ず附きて學ぶ者小學教育に就く者よりは多からむ其裁縫指南所は學校若くは寺院等を以て之に當て矢張家事經濟育兒法家庭教育の大意等を教へ其規律を簡にし土地の情況により指南時間を伸縮せば大に其功果あるべし只其裁縫師をして土着の人か又は其他小學教員の妻たるものならしめば尙更都合よしと思はる

ロ　女子實業學校を設くべし

凡へて愚民の女子教育の必用を感せさるは只目今の有樣を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

社告

女學雜誌社 第三回點取文 日本婦人授産業

右文題に對し寄答の方は來る十月卅一日迄に必ず其答文を寄送わらんことを乞ふ右日限后到着の分は遺憾ながら社評の中に入らざるべし

右寄送の答文ハ社評の上優劣を定め甲乙丙三等の點を得る者には各左の賞酬を呈す

甲點者 女學雜誌 三十冊 無代呈上
乙點者 同 二十冊 同
丙點者 同 十冊 同

演説著作 材料新誌

弊社發行の材料新誌は古今の著書中より演説著作の材料となるべき金言、名句、卓論、奇事、偉行、佳話、の類を集めたるものなり素と社員が文壇の時弊を見て餘業に編輯し發兌するものなれども世上の好評甚高く發賣部數も漸々に增加せり女學雜誌愛讀の諸氏は又同樣に御注文ありて編者の微志と苦辛とを御承知わらんことを希ふ

右毎月一回宛發行。帋數三十頁附錄四頁。一冊十錢全國無遞送料。見本を要せらるゝ方は郵券代用にてよろし

書籍取次

弊社は看客の便利を圖り凡そ女學に關係ある書籍にして東京府下の書肆中にて出版したるものハ一切無料にて取次郵送可仕候依て右注文の方は書名と出版者の宿所姓名とを合せて定價の金員を送附わるべし大抵ハ其內にて郵送賃を辨じ申すと雖も大部の書は別に郵賃を請求可致候

書捌所 取次の看客に 告ぐ

女學雜誌大賣捌の書店中不都合の廉御座候節ハ直に御賣を中止仕候社則に付右樣の書店より本誌購讀の看客はそれが爲め御不便不掛と存じ候よつて向後右樣の次第にて書店より御配達不仕節ハ直に本社へ御一報有之度(從來何書店より購讀せしとの旨御記入ありて)候早速郵送致し厚意を損ぜざる樣致度希候也

女學雜誌社

廣告

嘉言善行 修身龜鑑 乙號洋製美本全壹冊

今般小生儀右ノ如キ書名ニテ諸新聞雜誌等ニ散見セシ忠臣孝悌信義貞節儉約勉强格言其他現時ノ教育ニ適切ナルヿヲ撰輯シ甲號既ニ脱稿セリ猶乙號ニ及ハントス若シ猶ホ世ニ漏レタル言行ニテ摸範トシ小學生ノ德性等ヲ感勃セシムル可キヿモ多カラン乎伏シテ請フ全國ノ諸賢幸ニ筆勞ヲ吝マス陸續古ヲ署シ現今ノ確事ニテ前項ニ適當ス可キ者ヲ眞片假名交リ文ニテ御投稿アラハ實ニ我邦教化ニ裨益スルヿ尠少ナラン哉但シ取捨ハ編者ノ意ニアリ且ツ出版ノ上ハ御投稿ノ方ニ限リ實價ニテ御郵送仕候九拜

明治十九年十月十五日

埼玉縣下入間郡谷中村八番地
修身舍主 下山忠行敬白

●通俗學藝志林 第一號本年六月十日發行爾后毎月一回宛引續き刊行

●定價一部金拾錢●五部前金(郵税共)五拾貳錢●十部前金同壹圓●郵券代用一割增●前金の外一切遞送せず●特に一部御註文の向へ一錢郵券十一枚御送附のこと

本誌は本邦有名の諸學士は勿論歐米諸大家の論説を載せ高尚なる學術も其文は平易を旨としたれは誰にても讀み易く解し易し發行以來大ひに江湖の佳評を給はりたれは今般更らに躰裁を改頁し論説は固より雜錄雜纂等總て有益にして面白し殊に西洋の小説を反譯し或は理化學の問答を掲載したれば中小學校の生徒へ勿論農工商家の文明世界に立ちて優勝劣敗の戰爭を試みんと欲する諸君へ實に此智識の無盡藏たる通俗學藝志林を讀まざるべからざるなり

發行所 大坂東區淡路町二丁目十三番地 通俗學藝社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

驛遞局認可

○通學寄宿女子學藝教授（十九年九月教則改正）

教科

○裁縫○讀書○習字○作文○筭術○英學○和歌○琴箏○點茶○修身行儀

右一科を專學するも數科を兼修するも隨意とす專ら其適する所に從ひ實用の業を速成せしむへし

東京神田區中猿樂町十七番地と二十四號

松香舘水原

東京經濟雜誌價下廣告

毎土曜日發兌

我東京經濟雜誌は財政銀行商業に關する專門の週報にして傍ら政治上文學上其他社會万般の事件を論議報道する者に有之猶倫敦のエコノミスト雜誌に於る紐育のバンカース、マガジン雜誌に於けるか如し左れハ社會の要件ハ正確誤謬なきものを撰抜し網羅漏らすなく加ふるに毎半季目録を製して合本に便する事とし故に就きて索引すれハ社會の事件立ろに現れ恰も社會の事件を寫眞に取り置く者と申すも敢て誣ひずと信し申候而て今や我社會の形勢ハ年一年に經濟上及商業上に歸向仕候へハ益々經濟上の機關たるの任を盡し以て江湖愛顧の貴意に酬ひんか爲本月より**定價を引下け**申候尤も斯く定價を引下くると雖も躰裁等ハ凡て從前の如くにして且社員一同益々奮勵し紙上を改良せんことを期し申候間更に江湖の愛顧あらんことを希望仕候

◎改正定價○一冊金八錢郵税共九錢○十冊前金郵税共八十五錢○半年分（二十六冊）同金二圓八錢○一年分（五十二冊）同金三圓九十錢○但府內外共郵税申受候事

右に付既に前金御拂込相成り居候分ハ本月分より右の通りに引直し計算可仕候間左樣御承知可被下候

明治十九年十月

東京々橋區彌左衞門町七番地

經濟雜誌社

基督教新聞

第百六十七號十月六日發行

○小兒の日本、基督教徒の祈禱○敎報○雜錄。信仰は信川の進化せし者あり、大言罵詈も方便說、古今未曾有の傳○雜報○英文敎報○社告○廣告●右一冊三錢毎月各土曜日發行

東京々橋區瀧山町六番地

警醒社

定價

一册。五錢　郵税。一錢（但府內無郵税）
十册。四十八錢郵税。十錢（同前）
廿册。九十錢　郵税。廿錢（同前）
卅册。一圓卅錢郵税。卅錢（同前）

一ヶ月分女學雜誌代價十五錢　府外ハ十八錢
二ヶ月分同　三十錢　府外ハ三十六錢
三ヶ月分同　四十五錢　府外ハ五十四錢
半　年分同　八十八錢　府外ハ一圓六錢
一　年分同　一圓六十錢府外ハ一圓九十六錢

廣告

一行（廿八字詰）一回　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評す

WOMEN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.06 six months, *yen* 1.96 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at Jogaku-Zasshi-sha, No. 20 Yumichô, Hongô, Tôkyô.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町　巖々堂
東京芝西久保櫻川町　萬春堂
東京神田區雉子町　團々社支店
同神田區佐柄木町　東海堂
同日本橋區新葭町　良明堂
同日本橋區馬喰町二丁目　自由堂
同京橋區木挽町壹丁目　萬字堂
同本郷區元富士町　盛春堂
同本郷區春木町二丁目　解明堂
京都四條通小橋へ入　澤集光堂
大坂備後町四丁目　岡島支店
伊勢國松坂白粉町　家里初枝
仙臺國分町五丁目五番地　伊勢安支店

發行所　東京本郷弓町壹丁目廿番地　女學雜誌社

本局

持主兼編輯　巖本善治

印刷　森田豐

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治十九年十月五日發行
驛遞局認可

卌冊。一圓卌錢郵稅。卌錢（同前）

右一科を專學するも數科を兼修するも隨意とす專ら其適する所に從ひ實用の業を速成せしむへし
東京神田區中猿樂町十七番地と二十四號
松香館水原

東京經濟雜誌價下廣告

每土曜日發兌

我東京經濟雜誌は財政銀行商業に關する專門の週報にして傍ら政治上文學上其他社會万般の事件を論議報道する者に有之猶倫敦のエコノミスト雜誌に於る紐育のバンカース、マガジン雜誌に於けるか如し左れハ社會の要件ハ正確誤謬なきものを撰拔し網羅漏らすなく加ふるに每半季目錄を製して合本に便するが故に就きて索引すれハ社會の事件立ろに現れ恰も社會の事件を寫眞に取り置く者と申すも敢て誣ひずと信じ申候而て今や我社會の形勢ハ年一年に經濟上及商業上に歸向仕候へハ益々經濟上の機關たるの任を盡し以て江湖愛顧の貴意に酬ひんか爲本月より**定價を引下け**申候尤も斯く定價を引下くると雖も躰裁等ハ左の如く從前の如くにして且社員一同益〻奮勵し紙上を改良せんと期し申候間更に江湖の愛顧あらんとを希望仕候

◎改正定價○一冊金八錢郵稅共九錢○十冊前金郵稅共八十五錢○半年分（二十六冊）同金二圓八錢○一年分（五十二冊）同金三圓九十錢○但府內外共郵稅申受候事

右に付既ニ前金御拂込相成り居候分ハ本月分より右の通りに引直し計算可仕候間左樣御承知可被下候

明治十九年十月

東京々橋區彌左衞門町七番地ノ二

經濟雜誌社

基督教新聞

第百六十七號十月六日發行

○小兒の日本、基督教徒の祈禱○教報○雜錄○信仰は信川の進化せし者あり、大言罵詈も方便說、古今未曾有の傳○雜報○英文教報○社告○廣告●右一冊三錢每月各土曜日發行

東京々橋區瀧山町六番地

警醒社

價

一ヶ月分女學雜誌代價	十五錢	府外ハ十八錢
二ヶ月分同	三十錢	府外ハ三十六錢
三ヶ月分同	四十五錢	府外ハ五十四錢
半年分同	八十八錢	府外ハ一圓六錢
一年分同	一圓六十錢	府外ハ一圓九十六錢

廣告

一行	一回	前金拾錢（廿八字詰）
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批許す

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町 幾々堂
東京芝西久保櫻川町 萬春堂
東京神田區雉子町 團々社支店
同神田區佐柄木町 東海堂
同日本橋區新葭町 頁明堂
同日本橋區馬喰町二丁目 自由堂
同京橋區木挽町壹丁目 萬字堂
同本鄕區元富士町 盛春堂
同本鄕區春木町二丁目 解明堂
京都四條通小橋へ入 澤集堂
大坂備後町四丁目 岡島支店
伊勢國松坂白粉町 家里枝
仙臺國分町五丁目五番地 伊勢安支店

發行所
本局 東京本鄕弓町壹丁目廿番地
女學雜誌社
持主兼編輯 巖本善治
印刷 森田豐

WOMEN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.06 six [months], *yen* 1.96 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwam[oto] at Jogaku-Zasshi-sha, No. 20 Yumi[chō], Hongô, Tôkyô.

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY